The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

李義山の詩と西崑体

藪木　茂

一

晩唐の詩人、李商隠（字は義山）の詩と、宋初の文壇に重きをなした「西崑体」と呼ばれる一派の人達の詩（その作品集を「西崑酬唱集」という）との関係について、「四庫全書総目提要」の西崑酬唱集の条に

其の詩、唐の李商隠に宗法（のっと）り、詞は妍華を取りて興象に乏しからず。之に效う者、漸く本真を失い、惟だ組織に工みなるのみ。是に於て、優伶の撏撦の戯有り、石介、怪説を作りて、以て之を刺るに至り、祥符中、遂に詔を下して文体の浮艶を禁ず。

という。また、いずれの文学史においても、西崑一派の人達は、李義山の詩に模擬したと説かれているが、彼等は李義山のいかなる点を特徴とみなし、それに法ったものであろうか。

先ず、西崑酬唱集について、少しく触れてみよう。

この集に、西崑体の代表的人物である楊億は序して次の如くいう。

余　景德（一〇〇四～一〇〇七）中、佐修書の任を忝くし、群公の遊に接するを得たり。時に、今、紫微の錢君希聖、祕閣の劉君子儀、並びに懿文を負み、尤も雅道に精しく、雕章麗句、人口に膾炙す。……凡て五七言律詩、二百有五十章なり。其の属して和する者、計十有五人、析きて二巻と爲す。玉山策府の名を取り、之に命（なず）けて西崑酬唱集というという。

この序によって、西崑酬唱集の名の由来と、その概要を知ることができるし、また四庫全書総目提要には

凡て億及び劉筠、錢惟演、李宗諤、陳越、李維、劉隲、刁衎、任髓、張詠、錢惟濟、丁謂、舒雅、晁迥、崔遵度、薛暎、劉秉の十七人の詩なり。而るに億の序は、乃って、属して和する者十有五人と称す。豈に、錢、劉を以て主と爲し、億と李宗諤以下を十五人と爲せるか。詩は皆近体、上巻、凡て一百二十三首、下巻、凡て一百二十五首なり。而るに億の序、二百有五十首と称す。何れの時に二首を佚せしかを知らざるなり。

という。これは作者十七人の名を列挙し、詩の総数に言及したものだが、涵芬楼景印の明嘉靖刊本（四部叢刊本）には「西崑唱和詩人姓氏」として、もう一人「元闕」の名をあげている。

しかし、この「元闕」という名は、今見る四部叢刊本以外

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

の二書、すなわち、邵武徐氏刊本、粤雅堂叢書本にはない。詩の排列について見るに、四部叢刊本では「代意」の詩として八首あり、その終りの二首が、元闕、劉隲の作となっている。だが、他の二書では「代意」の詩は六首あり、その後に、「闕題」として、作者は劉筠、楊億となっている。なお、この二首の内容は三者とも一致している。

この二首について、今、どちらが正しいものか、決定はできないが、元闕の名は四部叢刊本のみ、しかも一箇所に見えるのみで、信頼性は甚だ薄い。元闕は四部叢刊本によれば、まさしく人名の如く判断されるが、他の二書の「闕題」とあるのと関連して考えると、恐らく人名ではないであろう。

したがって、ここでは他の二書によって、「闕題」の二首は、劉筠、楊億の作としておこう。

また、詩藪外編巻五（宋）には、宋の李商隠を学ぶ者として、楊億、劉筠、錢惟演のほかに、晏元獻をあげているが、宋の劉攽の中山詩話では、すでに晏元獻をも入れて、「皆、李義山を宗尚し、西崑体と号す」と述べている。晏元獻については、宋史本伝があり、それによると、かなりの文才があったというから、彼にもかなりの詩があったことが推察される。とすると、現存の西崑酬唱集は西崑体一派の詩を必ずしも網羅したものではないことがわかる。

なお、四庫提要にも言う如く、楊億の序は錢惟演、劉筠を中心人物と考え、彼等を称揚し、楊億自らには触れていない。だが、「紫微錢君希聖、秘閣劉君子儀、並負懿文、雕章麗句、膾炙人口」という表現は、単に二人について言ったのみでなく、自賛の響きが篭められているかの如くである。西崑酬唱集二百五十首のうち、楊億、劉筠がともに七十四首、錢惟演が五十四首で、その他の人々は十首に満たない。唱和の順序も、楊億が最初で、次に劉筠、あるいは錢惟演が和する場合が一番多い。これらのことからみると、楊億が中心人物であることは明らかである。

楊億の序にいう律詩二百五十章については、四庫提要では疑問を投じているが、現在のテキストでは、上巻一百二十三首、下巻一百二十七首、計二百五十首で、億の序の数と一致する。ただ、いささか問題になるのは、上巻の「荷花」の詩の次に「再賦七言」（七律）があり、その次に「又贈一首」として、劉筠、楊億、錢惟演、丁謂が七絶を作り、下巻に「戊申年七夕五絶」として、劉筠、楊億、錢惟演、薛映、劉秉の五人が、七絶を五首宛、合わせて二十五首作っていることである。（題にいう五絶とは、五首の絶句の意であろう。）いずれも絶句であるのに、これらをまとめて、律詩二百五十首とするのはどういうことであろうか。

二

次には、李義山の詩と西崑酬唱集との関連を見ることにしよう。先ず、両者に共通することは、故事の頻用ということ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

が言えよう。例えば、西崑酬唱集の代表作とみなされるものに「漢武」と題して、七人が相唱和した詩がある。

この詩はすべて、漢の武帝が神仙を求めたことについて歌ったものである。一方、李義山の詩では、漢の武帝を題材としたものに「茂陵」「漢宮」「漢宮詞」などがあるが、いま、それらと比較してみよう。

先ず、錢惟演の「漢武」の詩をあげてみる。

一曲汾に横たわりて鼓吹迴り　侍臣高会す　柏梁台
金芝燁焍として凌晨に見われ　青雀軒く翔け白昼に来る
候を東溟に立てて鶴駕を邀え　兵を西極に窮めて龍媒を待つ
甘泉祭罷んで神光滅し　更に人間に遣して玉杯を識らしめん

第一句の「一曲横汾鼓吹迴」は有名な武帝の「秋風辞」の

秋風起り　白雲飛ぶ
草木黄ばみ落ち　鴈南に帰る
蘭に秀づる有り　菊に芳しき有り
佳人を携え　忘る能わず
楼紅を汎べ　汾河を済る
中流に横たえ　素き波を揚ぐ
箫鼓鳴り　棹歌を発す
歓楽極まり　哀情多し
少壮幾時ぞ老いを奈何せん

（文選巻四十五）

を頭に置いて歌ったものであろう。

李義山にもやはり「秋風辞」をもとにした

秋風起兮白雲飛
草木黄落兮鴈南帰
蘭有秀兮菊有芳
携佳人兮不能忘
汎楼紅兮済汾河
横中流兮揚素波
箫鼓鳴兮発棹歌
歓楽極兮哀情多
少壮幾時兮奈老何

箫鼓淒として断えんとし　無復詠横汾
復た汾に横たうを詠ずる無し

（昭粛皇帝挽歌辞）

という句がある。錢惟演は言うまでもなく、直接には李義山のこの句から刺戟を受けたものであろう。

昭粛皇帝というのは唐の武宗のことであり、彼は在世中、神仙を求めることに熱心であったが、報われずして死んだ人である。この詩はそれを悼んで詠じたものであり、漢の武帝がやはり、神仙を熱心に求めたということから、武帝と武宗とを結びつけて歌ったものである。

第四句の「青雀」ということばも、時には「青鳥」とも表現され、「西王母」と共に李義山の好んで用いることばである。李義山の「漢宮詞」を見ると、

青雀西に飛んで竟に未だ迴らず　君王長えに集靈台に在り
侍臣最も相如の渇有れど　金茎の露一杯を賜わらず

青雀西飛竟未迴　君王長在集靈臺
侍臣最有相如渇　不賜金茎露一杯

の如くである。西王母の先駆をなすと言われる青雀が一度は

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

来たったが、去ってしまい、西王母も再来しなかったといい、また寵愛していた司馬相如が消渇の病になっても、武帝は長命の薬とされる、集靈台にある承露盤の露をただの一杯も飲ませなかったという。

第六句の「窮兵西極待龍媒」は、武帝の「西極天馬歌」の冒頭の句「天馬の徠るや西極よりす」（天馬徠兮従西極）をふまえたものである。

以上のごとく、銭惟演は李義山のよく歌う神仙に関することがらを李義山の詩の語句を踏襲しつつ歌っている。さらにまた銭惟演の詩は、李義山の「漢宮詞」の韻字「迴」「臺」「杯」をすべてそのまま用いている。これは形式面での摸倣と言えよう。

李義山の「漢宮詞」については、清の馮浩は「玉溪生詩詳註」で、「武宗の朝、義山閑居の時なり、借りて以て自ら慨することと多し」と注している。いったい李義山の詩の特徴としては、唐の武宗と漢の武帝を結びつけて、その神仙を求める態度を批判的に歌う手法をとるものが、かなり多く見られるが、この「漢宮詞」も馮浩のいう如く、「昭粛皇帝挽歌辞」と同じく、やはり武宗に関連する詩と解釈して間違いなかろう。

この「漢宮詞」は、自らを司馬相如に比しまた我が身の恵まれないことを、武帝の恩恵が司馬相如に及ばないことに托して、切実な響きをもって歌っている。

次には李宗諤の「漢武」の詩を見よう。

建章の宮闕　鬱として苔嶢たり　　建章宮闕鬱苔嶢
露掌の修き茎　倚として沈寥たり　　露掌修茎倚沈寥
平楽館中　角觝を観　　平楽館中観角觝
単于台上　天驕を懾す　　単于臺上懾天驕
蓬萊に気を望むも滄波濶く　　蓬萊望気滄波濶
太乙に年を祈るも紫府遙なり　　太乙祈年紫府遙
西母来らず　東朔去り　　西母不来東朔去
茂陵の松柏　冷として蕭蕭たり　　茂陵松柏冷蕭蕭

この詩の故事については、史記か漢書の武帝紀の重要な記事を羅列したかの感じのするものである。

第一句の「建章」については、漢書の「武帝紀」に「太初元年、柏梁台災あり……二月建章宮を起つ」とあり、第二句の「露掌」については、史記の「孝武本紀」に「是に於て、文成将軍を誅し、而して之を隠す。其の後則ち、又、柏梁、銅柱、承露、僊人掌の属を作る」とあり、その承露盤と、僊人掌を「露掌」といったものである。

第三句の「平楽館中観角觝」については、「武帝紀」に「元封三年春、角抵の戯を作す……元封六年、夏、京師の民、角抵を上林の平楽館に観る」とある。

第四句の「単于台上懾天驕」については、同じく「武帝紀」に元封元年、行くこと、雲陽自りし、北のかた、上郡、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

西河、五原を歴、長城より出て、北のかた単于台に登り、北河に臨み、兵十八万騎を勒す。旌旗千余里に径り、威、匈奴を震わす」とあるのをふまえる。「天驕」は匈奴を指し、「懾天驕」とは「武帝紀」の「威震匈奴」を頭に置いていったものであろう。

第五句の「蓬莱望気滄波濶」については、「孝武本紀」に「海に入りて蓬莱を求むる者言う、蓬莱は遠からず、而れども至る能わざるは、其の気を見ざればなりと」とある。

第六句の「太乙宮」は、漢代の長安にあった宮殿で、「紫府」は神仙の居処とされている。

終りの二句は、李義山の詩句を完全に摸倣したに過ぎない。すなわち、李義山の「漢宮詞」

通霊に夜醮し清晨に達す　　通霊夜醮達清晨
承露盤晞く　甲帳の春　　承露盤晞甲帳春
王母西に帰り方朔去り　　王母西帰方朔去
更に須らく重ねて李夫人を見るべけんや　　更須重見李夫人

とか、また「茂陵」の詩

玉桃偷み得て方朔を憐み　　玉桃偷得憐方朔
金屋修成して阿嬌を貯う　　金屋修成貯阿嬌
誰か料らん　蘇卿老いて国に帰れば　　誰料蘇卿老歸國
茂陵の松柏　雨蕭蕭たらんとは　　茂陵松柏雨蕭蕭

のうちの一句を、殆んどそのまま使っている。

李宗諤の詩の前半の四句は、単に故事を羅列し、博識を衒ったに過ぎないようであり、後半の四句では、神仙は求め難く、人の命は儚いことを歌ってはいるが、全体をひきしめる結聯が李義山の詩句を踏襲しただけであるのは、何としても迫力の乏しいものになった。「王母西帰方朔去」の句は、馮浩の注によると、「王母不来方朔去」とするテキストのあることがわかり、殆んど似ている。ただ「王母」を「西母」にし、「方朔」を「東朔」にしただけであって、多少の変化を与えたのであろうが、不自然さを免れない。第八句の「冷蕭蕭」は、李義山の「雨」を「冷」に変えただけである。またこのような李義山の語句との関係を離れてみても、一貫する主題がつかみにくく、優れた詩とはいかにしても考えられない。

韻についても、李義山の「茂陵」の詩とは同じ韻を用いている。「漢武」の詩について李義山の詩の韻まで摸倣しているのは銭惟演と李宗諤の二人だけである。

以上、「漢武」について、銭惟演、李宗諤二人の詩を見てきたが、その他の人々の句にも

柏梁に高宴す　詞仰ぐべし　　高宴柏梁詞可仰
汾に横たわり簫鼓し楽しみ窮まり難し　　横汾簫鼓楽難窮（刁衍）
若し憑虚なる王母の説を信ずれば　　若信憑虚王母説
東方は三度蟠桃を竊みしならん　　東方三度竊蟠桃（任随）

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

日辺の甲帳虚しく設くと雖も　　日邊甲帳雖虛設
汾上の楼船忘るべからず　　汾上楼船不可忘
（劉隲）

の如き句が見られる。これらはいずれも、先にあげた李義山の諸々の詩をまねて、武帝の「秋風辞」を意識して歌ったものである。

要するに、西崑酬唱集における「漢武」という詩は、武帝の熱心に求めた神仙、不老長寿といったことがらを中心に歌い、その用語は、義山の詩はもとより、遡っては「孝武本紀」、「武帝紀」や漢書の「東方朔伝」などの中より引用したものが多い。しかし、単に語句を摸倣して、羅列しただけといった詩が多く、遊戯的で、浅薄な詩といってもよかろう。

「漢武」の詩七首の相互の間の関係を見ても、李義山の詩との関連に於てではあるが、先に歌った人の詩を意識して歌ったと考えられる句が多い。この点にも、彼等の遊戯的性格が窺えよう。

西崑酬唱集を概観して、もう一つ気がつくことは、艶麗の風がめだつことである。この点については、やはり李義山の詩についても言われていることであって、李義山の場合は「無題詩」によって代表される一連の詩に特に顕著である。

西崑酬唱集中にも「無題」と題する詩が十五首見えるのは、李義山の「無題詩」を、彼の特色としてまねて受け入れたものであろう。

李義山の詩は、従来、「難解」あるいは「晦渋」の語で評されているが、就中、「無題詩」はその最たるものであろう。ここでは「無題詩」を中心に、西崑酬唱集との関係を見よう。

先ず、楊億の「無題」の詩を見ることにしよう。

巫陽の帰夢　千峰を隔て　　巫陽歸夢隔千峰
辟悪の香銷え　翠被空し　　辟悪香銷翠被空
桂魄漸く虧け暁月を愁え　　桂魄漸虧愁暁月
蕉心展べずして春風を怨む　　蕉心不展怨春風
遙山黯黯として眉長く斂め　　遙山黯黯眉長斂
一水盈盈として語未だ通ぜず　　一水盈盈語未通
漫りに鵾絃に託して恨みの意を伝え　　漫託鵾絃傳恨意
雲鬢　日夕　飛蓬に似たり　　雲鬢日夕似飛蓬

この詩には、先の「漢武」の詩に見たような形式的な摸倣は少ない。しかし、内容においては、李義山がしばしば歌う愛人との逢瀬のむつかしさについて歌ったもので、ほぼ傾向を一にすると考えてよかろう。

第一句の「巫陽帰夢隔千峰」は、義山の詩にしばしば見られる。例えば「深宮」の

豈に知らんや雨と為り雲と為る処を　　豈知為雨為雲處

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

祇だ高唐の十二峯あるのみ　　祇有高唐十二峯

のごとくであり、これは宋玉の「高唐賦」をもとにして歌ったものである。

第二句の「辟悪香銷」の語も李義山の好んで用いる表現である。例えば、「香炤え燈残きて爾を奈何せん」（香炤燈残奈爾何）（聞歌）、「金殿香銷え綺櫳を閉ざす」（金殿銷香閉綺櫳）（深宮）の如くである。

第五・六句の「遙山黯黯眉長斂、一水盈盈語未通」は、別れた愛人との隔りを、仙境のはるけさにかけて歌ったものであり、李義山の

劉郎は已に恨む　蓬山の遠きを　　劉郎已恨蓬山遠
更に隔つ　蓬山　一萬重　　更隔蓬山一萬重
（無題）

とも関連しよう。

李義山には次の如き「無題詩」があるが、これは短い逢瀬を嘆き、別離後の悲しみを歌ったものであろう。

相見る時難く別るるも亦難し　　相見時難別亦難
東風　力無く百花残わる　　東風無力百花残
春蚕　死に到りて糸方めて尽き　　春蠶到死絲方盡
蠟炬　灰と成りて涙始めて乾く　　蠟炬成灰淚始乾
暁鏡に但だ愁う　雲鬢の改まるを　　暁鏡但愁雲鬢改
夜吟応に覚ゆべし月光の寒きを　　夜吟應覺月光寒
蓬山　此を去ること多路無し　　蓬山此去無多路
青鳥　殷勤に為に探り看よ　　青鳥殷勤爲探看

この詩の第四・五句の「蠟炬成灰淚始乾、暁鏡但愁雲鬢改」が、それぞれ楊億の第二句「辟悪香銷翠被空」、第八句「雲鬢日夕似飛蓬」とやはり関連するものであろう。

このような「無題詩」に見られる艶麗さは愛の喜びではなくて、別離後の距り、求めて得られぬ愛の悲しみ等を歌ったことに窺えるようである。

以上、内容面での共通性を見てきたが、表現からみると、楊億の「一水盈盈語未通」は李義山の

扇は月魄を裁つも　羞掩い難く　　扇裁月魄羞難掩
車は雷声を走らすも語未だ通ぜず　　車走雷聲語未通
（無題）

を恐らく借りて来たものであろう。

以上、西崑酬唱集が李義山の詩にならった点について、その顕著な例を挙げて見てきたが、要するに、彼等は、発想を李義山に借りたり、部分的な語句を借りたり、故事の頻用という手法をまねたりしていることがわかる。

中心になる楊億、劉筠、錢惟演の詩にはかなりの力作もあり、必ずしも一概には言えないが、西崑酬唱集全体を通じてみると、李義山の詩の語句をそのまま使ったとみなされるものが少なからずある。それらは、李義山の詩の内容とか、歌われた背景、そこから醸し出される悲哀感などは汲みとらないで、ただ遊戯的に語句の摸倣に終ったものが殆んどである。四庫提要のいう如く「掇拾」の譏りを受けるゆえんである。

NII-Electronic Library Service